

町長インタビューは

No.42



一宮町長
馬淵 昌也

今年有加納久宜公没後百年ということで、公のご業績について学ぶ機会が多くありました。公は、その生涯を通じて、大きな事業を多く成し遂げられました。私が公のお人柄・お考えの中で、特にすばらしいと感じることが3つあります。

一つ目は、今年の3月号にも記しましたが、公が一貫して、地方・地域の振興に心を砕かれたということです。公

は、国の繁栄の礎は、地方・地域の繁栄にある、と考えられました。鹿児島県知事時代の、インフラ・農業・教育各方面での鹿児島県建て直しや、東京・入新井村での信用組合設立などの地域おこし、そして農商務大臣を断つて一宮町長にご就任され、町を全国模範町村へ押しあげられたことなど、公は地域振興において目覚ましい成果を残されました。麻生副総理も記念式典でお話し下さいましたが、公のように、中央よりも地方の振興に関心を向けられた方は、明治の偉人の中では珍しく、たいへん先見性に富んでおられると思います。二つ目は、公が身分の上下に関わらず、誰をも平等に扱われたということです。当時、加納家にも使用人の男女

が働いていたそうです。公は、時に、使用人の人たちに、「おまえたちにもそれぞれ意見があるだろう、座敷に上がって述べなさい」といわれ、使用人たちは大変恐縮したそうです。当時は、江戸時代の名残もあり、身分の高下は厳然たるものがありました。公はそうしたことを無視して、一人一人を大事に扱われたのです。これは公の人間性の豊かさを示すものです。

三つ目は、公が現場を大事にされたことです。鹿児島時代には、離島も含めてつづさに視察を行い、現地の人々とひざを交えて話をされたそうです。後年、鹿児島を再訪した時の最初の言葉は、「昔植えたミカンの木が見たい」だったといわれます。地域振興のために、まず現場に身を置き、真剣に状況を見極めて、有効な施策を行う、というのが公のスタイルでした。机上の空論を振り回すということはありませんでした。

私は、こうした加納公の精神は、大変すばらしいものであると、深く尊敬の気持ちを抱いております。今後、加納公を目標として奮闘してまいります。一宮町長としての努めだと、深く肝に銘じています。